

児童養護施設入所児の自他の評価の差異が持つ意味

—子どもの特性と職員の愛着スタイルに着目して—

17003PCM 熊崎 由香里

問題と目的

1. **児童養護施設の現状**：我が国の児童養護施設においては、多くの入所児が不安定な養育環境で育ち、乳幼児期におけるアタッチメントの形成に未解決の問題を抱えたまま、家族と離れて暮らしている（宇賀神・山崎・神崎，2007）。子どもが十分に安心感を体験できる「抱える環境」を提供し、二者関係の確立から他人との信頼関係の回復へと繋ぎ、情緒発達を依存から独立へと向けることのできる施設養護のあり方を検討することは、今でも重要な課題となっている（石，2006）。しかし、虐待を受けた子どもが抱える重篤な心理的被害に基づく様々な行動上の問題と虐待問題へのケアは難しく、施設内の混乱や、支援にあたる施設職員の疲弊もまた見逃せない課題である。また、愛着障害を抱える子どもの挑発的な行為は生易しいものではなく、自己と他者に対する根深い不信感を基盤に発展しており、そこに職員と子どもとの間に真の信頼関係を作ることの困難さの背景要因があることも指摘されている（蘇，2014）。

2. **子どもの特性**：愛情欲求をめぐる心の傷を抱える入所児たちは、施設生活において支配・服従関係という特徴的な対人関係のパターンをとる（森田，2011）など攻撃的な側面があるだけでなく、多方面にわたって情緒や行動の問題があることが指摘されている（坪井，2005）。

3. **入所児の自己イメージ**：石原・後藤（2017）によると、愛着に困難を抱える子どもは、自己表出や衝動の噴出を恐れて対人的な距離を取って自己を閉ざし、偽りの自己を発展させる子がいる一方で、自己が拡散し希薄化して無方向の自己表出になるために、本当の自分がわからなくなる子がいることを指摘した。そして、子ども自身の見て欲しい姿と周囲の大人の見ている子どもの姿の認識にずれが生じ易く、その認識

のずれが効果的な支援に繋げることを難しくさせていると述べた。

4. **子どもと職員の関係性について**：施設での支援において、良好な人間関係の形成が環境療法としての心理的ケアの中核となる（佐藤・佐藤・山口・古瀬，2011）。その一方で、日常的に子どものトラウマ起源の行動化にさらされ、否応なく巻き込まれていくことで職員は二次的トラウマを受け、バーンアウト（燃え尽き）してしまうことがある（藤岡，2012）。積・横山（2003）は、職員自身が自己の特性を把握することで、子どもとの関係性の中で起こる自己の感情や状態を理解でき、バーンアウトを予防する効果が期待できると述べている。

これらの知見を踏まえ、本研究では職員の愛着スタイルと子どもの特性が、子どもの自己評価と職員による評価の一致・不一致にどのような影響を与えているのか、また、評価の差異がどのような意味を持つのかを検討することにより、両者の関係性の向上を考える上で指針の一つを得ることを主要な目的とした。

研究 1

1. 方法

(1) **調査協力者**：大舎制をとる児童養護施設に入所している小学生 4 名と中学生 4 名（平均＝11.0 歳，SD＝2.20）と、施設職員 16 名（平均＝28.38 歳，SD＝7.54）の協力を得た。

(2) **調査内容**：承諾の得られた子どもに自分自身の問題を評定するチェックリストの YSR とバウムテスト、中学生には、それに加えて動的施設画を実施した。職員には、対応する子どもの問題を評定するチェックリストの CBCL と、一般他者を想定した成人の愛着スタイル尺度の質問紙を配布した。子どもには個別に調査を実施し、職員には個別に依頼して回収した。

2. 結果と考察

(1) 全体の YSR と CBCL の相関 : YSR と CBCL において先行研究にならい、スピアマンの順位相関係数を用いて相関を算出したところ、両検査の対応する尺度間に有意な相関が見られたものはなかった。一方で両検査の異なる尺度間において有意な相関が見られた。このことから、子どもの困難感を職員が見逃しているのではなく、子どもと職員の間で問題があると認識している側面にずれがあることが分かった。

(2) 愛着スタイル別の YSR と CBCL の相関 : 愛着スタイルが安定型の職員の CBCL と YSR において「社会性の問題尺度」に有意な正の相関が見られた ($r = 902, p < .01$)。また、愛着スタイルが不安定型の職員の CBCL と YSR において「非行的行動尺度」に有意な正の相関が見られた ($r = 741, p < .05$)。このことから職員の愛着スタイルの違いによって、子どもと共通した認識をもちやすい側面が異なっている可能性が示唆された。また、両者の総得点の相関を比較すると、安定型の方が不安定型よりも子どもとの相関が高かった。これは、安定型の方が子どもの問題を全体的に理解していることを示しているが、尺度毎にみると、異なる尺度間に有意な相関が見られた。このことから、職員は子どもが問題を抱えていること自体は理解しているが、どこに問題を抱えているかまで理解することは難しいことが推測される。

研究 2

1. 方法 : 研究 1 で明らかになった認識のずれの内容を検討するため、小中学生共にバウムテストを、中学生には加えて動的施設画を実施した。
2. 結果と考察 : YSR と CBCL の評定の差異が持つ意味について、子どもの自己イメージと職員の特性から理解を試みるため事例を通して検討した。その結果、入所児の多くが居場所感の希薄さや抱えられている感覚の乏しさを感じていた。YSR と CBCL を個別にみると、子ども本人と各職員との間では尺度間にばらつきが見られた。このことから、子どもは表現したいものを表現することが難しい可能性が考えられる。そのため、子ども自身が伝えることができているという感じや、職員に伝わっていると感じる

体験や感覚が乏しいことが、子どもの居場所感の希薄さ、抱えられている感覚の乏しさにつながっている可能性が考えられる。

愛着スタイルの違いによって、認識している子どもの問題が異なっていた。他者に対して肯定的に捉えている安定型は、子どもの行動を善意で認識しやすい可能性があること、反対に、不安定型、主に拒絶型は他者の否定的な側面に敏感に反応し、子どもの行動化によって振り回されやすい可能性があることが推察される。

総合考察

1. 自己評価と他者評価のずれについて : YSR と CBCL の異なる尺度間での相関が見られたことは、子ども側の要因として、自分の抱えている問題を別のサインとして表現している可能性が考えられる。川戸・後藤 (2016) も、子どもたち本人ですら「本当に分かってほしい自分」が何なのか、どのようなものなのか、分からないまま葛藤しているため、子どもたちの見て欲しい姿を把握することは難しいものであることを指摘している。また、研究 2 においても、自己存在感の薄さや現実実感の希薄さが見られ、自己イメージの混乱や拡散が行動化の背景にあることが示唆されている。

2. 職員側の愛着スタイルについて : 安定型と不安定型の職員では子どもと共通して認識している問題の側面が異なっていた。このことから、愛着スタイルの差異が YSR と CBCL の差異に影響している可能性が示された。しかし、個別事例を見ていくと、愛着スタイルに関係なく、職員によって問題としている側面の評定にばらつきが見られた。このことから、YSR と CBCL の差異には愛着スタイルだけではなく、勤務年数や性別、養育観など複合的な要因が考えられる。もしくは子どもは、職員の愛着スタイルが安定型か不安定型かによって、表現の仕方を変えている可能性が考えられる。

本研究から、認識のずれは子どもと職員双方の多要因が複合して生じていることが考えられる。関係性の向上のために、子どもの特性だけではなく、支援者側の特性も含めて考えることが重要であると考えられる。